

令和五年四月六日(木)

兼題『春燈(灯)』、席題『風』

二十四節氣の“清明”の翌日、句会を日本倶楽部にて開催。

宮原 凧

そよ風にさくら舞い込むテラス席
青き踏む家籠りより飛び出たり
前力ゴはつくしんぼうと文庫本
雨だれのスタッカートやあたたかし
開花待つひと日ひと日よ春灯し

松田 一文字

はらはらと風に舞ひまきし花筏
春ともし庭を横切る猫の影
溪流につり糸光り風薫る
池めぐる小さな旅や花の雲
花辛夷母逝きし日の近づきて

首藤 しずを

いづこより風船飛び来池の釣
川風の青める岸辺鳥雲に
巢立ちたる教室の窓飛花落花
穏やかに過ぎゆく一日豆の花
病窓に春燈の濃き消灯時

中村 晃也

ピンと張る子犬のリード風光る
川筋の家並ぼんやり春灯し
春風のやうに微笑む二人連れ
春光や風の岬の乱反射
春灯しファドの流れる石畳

大津 そうかい

天上の星屑地上の犬ふぐり
そよ風の物干台へ初音かな
花吹雪に身を包まるる親子かな
「また明日」みんな皆去り春灯
花筏水面に映るニンフ像

長尾 進一郎

春深し我が古い猫の恋知らず
卒業の証書を抱き風に向く
春暁や今日一日の力受く
船宿の春燈映る川面かな
朝ドラのヒロインの老け弥生尽

安藤 晃二

春灯下ダンテと共に転寝す
東風吹くや筑波嶺遙か土匂ひ
春驟雨抜け花びら被り車帰る
三椀のまるき黄色や庭に出む
検査結果異常なき日の花曇り

高橋 由紀子

春灯や主なき家をほの照らし
藁葺きをゆるり巡りて花筏
桜抱え賑やかな友訪ね来ぬ
うづくまる猫と目が合う春灯下
仔犬抱けば鼓動愛しや若葉風

内藤 まりこ

落ち椿姿のままにひっそりと
野辺の道端でタンポポ背比べ
風光り尾長飛び交う雨あがり
春灯や桜霞みて雲となり
フラッコの風を切りたる花に向け

志村 良知

それぞれの向き故在りや辛夷咲く
桜若し新時代の色明々と
春の疾風力モメは斜に海の道
逝きし夕春霞赤き満月
燈明の揺らぎて春の夜伽かな

新田 ゆふき

レース編む母の手先や雪柳
インドカリー柳青める風の中
終電の車両の吐息花降らす
うぐひすも人も自惚れ花の下
春灯し鱒寿司を買ふ駅ホーム

森田 元斐

薪くべる夫へ川風春の色

宸筆の至情に揺れる春灯

朝の日の届く縁側初桜

着納のセーラー服や桃の花

波消や愁ひを誘ふ春の川

浜口 須美子

いつせいに発つ鳥のさま紫木蓮

春灯下行きかふ人は微笑みて

檠（ひこばえ）は老桜の命託されて

花みもぞ風従えて影溢れ

落花盛んより遠くへと競い合ふ

西川 知世

足元の椿の緋色踏むまじく

あれが香久むかう畝傍や春の風

奥千本花には早き山気かな

山幾重花に膨るる吉野道

軒深き大和の家並春灯

次回は令和五年五月四日（木）、

兼題は初夏の季語「更衣」（宮原風さん出題）、席

題は西川知世さん出題の「立」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

更衣（ころもがへ）陰暦四月一日をもって衣服や室内調度などを夏のものにあらためることである。宮中行事で、女御更衣という役職があったところから来ている。貴族社会の約束事が民間に広まり、明治以降も、学生、勤め人の制服など庶民の生活に引き継がれていった。現代では、冬でもコートの下はＴシャツ、というように、厳密な日付や行事は意味をなさなくなっている。

しかし、五月が近づき、夏の日差しが感じられると、夏服の軽やかさを楽しむ気分には変わりはなく、現代にもたくさんの句が生まれている。

長持に春ぞ暮れ行く更衣

西鶴

一つ脱いで後に負ひぬ衣がへ

芭蕉

とすとへば片手出す子や更衣

一茶

雲はみな動きめぐるや更衣

加藤楸邨

衣更へて身辺の句のほか詠まず

安住 敦

更衣百歳の腕通したる

大串 章

灰皿も硝子にかへて衣更へ

吉屋信子

みほとりに風湧くおもひ更衣

鷹羽狩行

白神に旅の衣を更へにけり

黒田杏子

ぺこちゃんもポこちゃんもけふ更衣

いさ桜子